

---

ハッピーバースデーをありがとう

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハッピーバースデーをありがとう

### 【Nコード】

N7366C

### 【作者名】

こつぶ

### 【あらすじ】

9月x日。その日は青子の17歳の誕生日。けれど快斗は17歳の誕生日を迎えたその日、彼女のバースデーに現れることはなかった。日付が変わる寸前に青子にかかった電話。そうして彼女に贈ったプレゼント。青子の家の周りの夜景全てが彼のプレゼントだった。素敵なプレゼント。だけど本当は、青子は、快斗の傍にずっといたかっただけなんだよ？原作3巻「ブルーバースデー」より、その後日談。3巻を読んだ121ページを読んだあとにこの小説を読んでいただくと・・・（笑）。・・・粗が見えてきます（だめじ

やん）（注）これは、青子ちゃんバースデー企画「ブルーバースデー」にて贈らせていただいたものに誤字脱字など修正を加えたものです。

+ 前編 +

「青子、ごめん・・・」

「いいよ、別に」

17歳になつてはじめての夜。快斗と青子のはじめての会話。受話器ごしだけれど、快斗の温かさが青子にはしっかりと伝わっていた。

別にそんなに怒っているわけじゃない。

だって、快斗がくれたのは、青子の家から見渡す限りの夜景だよ？ちよつと近所迷惑な演出だけど、どうしてそんなすごいことができたのかは青子にはわからないけど・・・。

だけど、こんなすごいバースデープレゼントもらったことないから・・・。

それなのに。やっぱり寂しいと思っちゃうのは、物足りないって思っちゃうのは・・・。

青子はやっぱり、欲張りなのかなあ・・・。

「ねえ、快斗」

「…うん？」

「もう少し、もう少しだけ、声を聞かせて???…快斗の声が聞きたいよ」

受話器をぎゅっと握り締め、目の前の夜景を見つめ、正面のビル

に光の文字で描かれた『ハッピーバースデー 青子』の文字を何度も何度も噛み締めて。

どうしてだろう、どうしてこんなに素直に言えちゃうのだろう。それはやっぱり目の前の快斗がくれたバースデープレゼントのおかげ？

…それとも、逢いたいっていう気持ちが強すぎるから…？

「ばっ、バーロ、明日学校行ったらいくらでも聞けるじゃねーか、何言ってるんだよ」

照れているのか、焦っているのか、ちょっとだけ早口になる彼の声。

「…ううん、今がいいの。17歳の1日目。青子は快斗とこういう風に2人でお話したかったんだよ？快斗と、いっぱいいっぱい、過ぎたかったんだよ…？」

青子がそんな風に呟いた、…その瞬間――。

1階のキッチンの壁にかけられている柱時計が、12時の音を告げた。

タイム、リミット。

時刻は12時半を回っていた。

黒羽快斗はある女性の屋敷に来ている。…それは、中森青子の家ではなく、とある『館』。

「あら？こんな夜遅くのご来訪とは、一体何の御用かしら？珍しいですね、貴方ともあるう方が。寝込みでも襲うつもりでしたのかしら？それならば堂堂としてらしてくださいな。言ってくれましたらこんな時間じゃなくても、私はいつでも喜んでおつきあ」  
「違う」

目の前で真っ向から否定されながらも、優雅に藤の揺りかごのような椅子に腰掛け、黒髪の美女、紅子は艶やかに微笑んだ。彼女の身に纏うその服は、ネグリジェでもパジャマでも私服でもなく、カラスのような、黒い装束。そのいでたちに快斗は思わず苦笑する。まるで映画や御伽噺に出てくる悪い魔法使いのようだ。・・・まあ本当に魔女なわけだけでも。

家でもこんな服着てんのか、と。…これじゃ俺が家でもキツドの装束を着ているのと同じだ。そう言おうとして、やめておいた。ヘタなことを言って彼女の機嫌を損ねるのは手ではないと思ったからだ。

「わかってますわ。…中森さんのことでしょう？」

くすり、彼女は何でもお見通しだ、というように小さく笑んだ。  
ほら、こいつは何でもお見通しだ。思わずハツと鼻で笑う。それは彼女が使うなんちゃらという魔法の類か。それとも、ただの女の勘というやつか。椅子の脇の、不気味な石の台の上に置かれた水晶玉をつつと弄りつつも。

「パーティではすごく寂しそうでしたわね…ホント、罪な男キトですわね、貴方は」

くすくすと笑いながら、紅子は妖艶に快斗を見上げた。思わずげんなりして、快斗は口を開く。

「そこまでわかってんなら、おめーの魔術チカラでなんとかできねーか…？時間を戻すチカラ。たった一度でいいんだ。…前日に。青子と17歳の誕生日を、もう一度初めっから過ごしてえんだ」

「…残念ですけど無理ですわね。どんなに位の上の魔女だとしても、魔女は神ではない。時間の流れに逆らうことはできませんわ」

「…そっか」

がつくり頂垂れる快斗を目にして、紅子は悪戯っぽい笑みを浮かべる。

ぴっ、と細く長くて白い人差し指を、快斗の目の前に差し出して。

「…ただ一つ。一つだけ方法がありますわ。魔法使いの基本中の基本…。というより、もう用意は整っていたりするんですけれどもね」  
「…え、それって…」

急に彼女が立ち上がり、奥の部屋までゆつくりと、ひたひたと音をたてて行き、それから中へ消えた。覗いてはいないけれど、そこには何か不気味なものが、あるいは不思議なものがあるような気がして、前へ進むのに一瞬だけ躊躇する。ほんの少しだけ遅れて、立ち上がった。

「ちよつ、どこ行…」

そして少しだけ開かれた鉄扉を僅かに開いたとき――  
白い煙のような靄が部屋の中いっぱいになり立ち込めていて、思わず足を止めた。

ただの煙ではない。ツン、とした何か刺激臭。思わずポケットに入れておいたハンカチで口を押さえる。

「紅子…だ、大丈夫か!？」

一体何をやらかしたんだ？

正直そんな思いを抱えながら鉄扉を思いっきり全開にしたとき、  
ちよつと大きな黒い台が目の前に現れて。

そして。

そこで目にするのは、誰かの…。白くて細い足。そして、見覚え  
あるピンクの布地の、快斗の嫌いな魚のパジャマ。それが白い煙に  
邪魔されながらも少しだけ現れて。輪郭もぼんやりと形を成してい  
く。

…まさか。

…そんな。

あまりの目の前の衝撃に、驚いて息を勢いよく吸い込んだ。ひよ



っという音。

そして。

手にしていたハンカチが力を抜いた瞬間、手から滑り落ちぼとりと床に落ちて、彼が呟いた。

「ああ…こ？」

なんであいつがここにいるんだ？

信じられない思いを抱えつつも、それでもとりあえずこの部屋から青子だけでも出させたくて、彼女が眠る台に近づこうとした。なのに、なのにもみるみるうちに意識がどんどん遠くなって。

前へ進めない。先へ、進めない。  
力が出ない。

もう、歩けない。  
意識が・・・

そんなとき、カタリと音がして。快斗は目だけ音の鳴る方に向けてようとした。

思ったとおり。自分の顔を嬉しそうに覗き込む紅子の美しい顔がそこにあつて。

「……紅子、おま一体何、を……」

クスリ、いつのまにか黒のマスクのようなものをつけた紅子が奥から現れると、目元を少し細めて笑った。

「大丈夫、安心なさいな。あとで私も向かいますから」

「う」

「おやすみなさい…良い夢を」

その一言で。

まるでぴんと張っていた糸を鋏で切ったように、快斗の意識はぶつつりと途絶えた。

朝。

中森青子はそのとき不意に目を覚ました。何かに起されるわけもなく、ただ自然と。

壁にかけてあるキャラクターものの時計はまだ6時48分を指し

ていて。まだ自分が起きる時間よりほんの少し早い。

ボンヤリ天井を見上げる。

そういえば今日はとてもいい夢を見た気がする。

誰かに会って…。

確か自分がすごく大好きなヒトだったような気がするが、それが誰かは思い出せない。

快斗だったか、紅子だったか、父親だったか、母親だったか。それとも全然違うヒトだったか。男だったか、女だったかさえも。

ただ、思いもかけない言葉をかけられたか何かしたような気がする。

「…変な夢だったな」

けれども心地よい夢。一体どんな夢だったのか、それを思い出せないのが何とも悔しい。

さて、これから学校へ行く準備をしようか。

大きく両手を天井に突き出し、伸びをする。それからサイドボードの上に置いてあった携帯を手にした瞬間、それは鳴った。

6時50分。起きる時間を知らせるアラーム。そして、その音楽は、いつもの流行の音楽じゃなくて。

『HAPPY BIRTHDAY』。

「…れ？間違えちゃったかな」

この曲は自分の誕生日の日だけに設定していたはずなのに。そして、昨日その日を迎えて。気持ちいい朝を迎えたはずなのに。

誕生パーティーも祝ってもらって、沢山プレゼントを貰って、机

に一杯並べて。夜は快斗がいなくてちょっぴり悲しかったけど。

…って。

「あれ？」

昨日置いておいたはずのプレゼントの箱の山がない。活けておいた花もない。

まさか、お父さんがどこかに移しちゃったの？娘が寝ているときにこっそり忍び込んで？

いろんな疑惑が頭を抱える。でも、ケータイの蓋を開けば、日にちは。

「ウソ…」

日にちは青子の誕生日、9月X日だった。

「ウソ、ウソ、ウソ！！どうして！？何で昨日に戻っちゃってるの！？だって…青子、昨日確かにっ…。もうわけわかんないよぉ！」

快斗、助けて…！！！！

思わず、携帯電話の履歴ボタンを押す。もしかして寝ているのかもしれない。起きていたって、話を信じてくれないかもしれない。それでも、1パーセントの望みを信じて。

- - - 彼の声を待った。

1回、2回、…3回目の通信音。そして、聞こえるのは。

「おはよう、青子」

びつくりするほど落ち着いた声で彼が電話に出る。

「…かい、と??ねえ、どうして、あたし…」

「…戻っちまったなあ、『昨日』に」

「…え?」

くつくつと含み笑いをする快斗に、思わずきょとんとして。

「『昨日』?」

「なんだ、おまえ自分の誕生日も忘れたのかよ。寝ぼけてんじゃないのか?」

「…あ、うん」

何でだろう。

騙されているのかもしれない。携帯電話の時計機能が壊れているだけなのかもしれない。

それでも、彼が今、電話を取ってくれて。ちゃんと自分が期待したようなことを言ってくれたから、思わずほっとして涙が出そうになった。けど、やっぱりちよっとナマイキな態度が気に入らなくて。むっとして声を荒げる。

「バツ、寝ぼけてなんかいないわよ!!快斗こそ、何全てを知ってるようなこと言ってるのよ!ちゃんと青子にわかるように説明しなさいよ!」

「…さあ、俺もあんまりよくわからないんだけどさ。…どうやらこれ、『夢』らしいぜ?」

「…夢?!」

「そうそう、夢…。もう一度17歳の誕生日をやり直すために、つてね。とある魔法使いにお願いしといたんだ。そしたら」

「何よそれ、胡散臭いんだけど…」

「ま、夢だからいーじゃねーか」

「…そうなのかなあ」

2度目の17歳の誕生日。パジャマ姿のまま半信半疑で部屋を出て。既に仕事に出てしまった後の一人残されたりビングで椅子に座り、大きく伸びをする。テレビをつければ、確かどのチャンネルも昨日の朝やっていたようなニュースで。

「…なあ、青子」

繋がったままの電話の向こうで彼が言った。

「うん？」

「学校サボって、どっか行かね？」

「ええっ!？」

突拍子もない彼の思いつきに、思わず声のトーンを上げた。

「ダメよ!何言ってるの、先生に怒られちゃうよ?!青子は不良少女にはなりたくありませんー」

「ばーろ、所詮夢だよ、夢」

「でも…」

「大丈夫、朝になったらそんなのウソになるから」

「それでも罪悪感っていうものは残るんじゃないの?やだよ、これが夢だとしても、後味悪い事はしたくないし…」

「俺さ…」

急に沈んだような、真面目なような快斗らしくない声をするから。

「…うん？」

「……………もう、後悔したかねーんだ」

彼の声が一瞬そこだけ響いたような気がした。

「昨日の言葉、自分で言っというて、忘れたわけじゃねーよな？」

「…え？」

「…俺といっぱいっぱい過ごしたかったって話」

「…あ、ああ」

改めて口にされると、どうしてそんなことを言えたのか自分でも恥ずかしくなるけれど。

「願いごと、叶えさせてくれねーか。今だけ、おまえの魔法使いになりたいんだ」

「…っ」

どきんっ。

心が揺れた。

「…何よ、いつもはマジックマジック言ってるクセして…」  
「…あん？」

「何でもないっ」

わざと何でもない口調を試みる。けれど、どうしても緩んだ頬は直らなくて。

夢でもよかった。

こういう風に過ごしたかったんだ。

みんなで過ごした誕生日。それはそれでとってもとっても楽しかった。

でも、やっぱり快斗がいないと、すごく寂しくて。

やっぱり快斗がいないとだめだって気がついた。悔しいけれど。

「快斗…。今、どこにいるの？」

「あん？…家。でもせっかくだし、もう一眠りくらい…」

「だあめ。早く着替えて9時には江古田駅に待ち合わせね。トロピカルマリランド連れてってもらうんだから！もちろん、快斗のおごりね！」

「…え？マジかよ今月金欠でキツイんですけど…」

「夢なんだから何とかならないの？」

「あのなあ。…夢だろーが何だろーがねーもんはねーんだよ」

いじけた声に思わず口元を綻ばす。

「なあ。江古田ショッピングモールでもよくね？江古田動物園とかさあ、近場で。あ、そうそう、この前」

「ちよっ…何言ってるのよっ。今日は青子のお誕生日だよ？願い事かなえてくれるんじゃないの？魔法使いさん」

「…あー。ハイハイ」



観念したのか乾いた笑いを浮かべた受話器の向こうの彼に思わずぶつと噴出して、暫しの別れの言葉を述べた。電源を切ると、さて、戦闘開始の顔になり。

今日着ていく服は何にしよう。

恵子に選んでもらったリップもつけようか。快斗は気づいてくれるかな？

大切な大切な17歳の誕生日。  
とっても嬉しい誕生日。

ガタンゴトンと電車に揺られながら、青子は隣にいる快斗の横顔と、手に持っている携帯電話の液晶画面を、何度も何度も見比べた。画面には青子の誕生日と、時刻は朝の9時16分を示している。

今でも疑問は消えない。

本当に、今日は9月×日なんだろうか。昨日をもう一度体験しているのだろうか。

夢なんだから深く考えるなよ、と快斗は言うけれど、それでも…。

いろんな考えがぐるぐる頭の中で回っていて。…そうしてそんな時に、じろじろと多くの人の視線を感じた。きつとこんな平日に私服でデートに行きそうな様子のカップルを疑わしく思っているに違いない。

これが夢だったならば、こんなところまでリアルに再現しなくてもいいのに。

…本当にこれは普通の『夢』なんだろうか。快斗は夢の中で自分が作り上げた『快斗』なんだろうか。それとも、この快斗は現実で…おんなじ夢を共有しているのだろうか。

…後者であってほしいと思う。けれど、そんなことがあるのだろうか。あつていいのだろうか。そんな、小説のような話…。

「…なんだよ、青子。人の顔ジロジロ見て。…気持ちわりいな」

「う、うん…」

「大丈夫だよ、とりあえずオメーが満足するまできつと夢覚めないだろうから。きつとそれがあいつのオメーに対する誕生日プレ…」

「あいつ？何、誰のこと言ってるの？」

「え？あ、いや、何でもねえ」

慌てて手を顔の前で振って、快斗は笑って誤魔化しているように見えて。

全てを知っているような快斗にちよつとだけずるいと思いながらも、いつしか次の話題に移り、そんな想いも少しずつ薄れていった。

トロピカルマリナランドは青子にとっても、快斗にとっても初めてだ。テンションが高くなるのは当然。…なはずなのだけど。

「……………なーんでこう魚ばかりいるんだよ」

入場ゲートから一步、中に入った瞬間、吐き出すように隣で快斗が呟いた。

中に入れば、魚やたこの着ぐるみが出迎える。出入り口を飾るモチーフには魚・さかな・サカナ。彼が吐き気を覚えるのはきつと不思議なことじゃない。青子も出入り口に入ったあたりで、トロピカルランドにしておけばよかったかなあとは思ったけれど、もうそれは後の祭りです。

「え、だって、当たり前じゃない。『マリナ』なんだから。海をモチーフにしたテーマパークなんだよ？そんなの知らなかったのー？

だっさー」

目を半月にして快斗をからかった。げんなりしている彼にちよつとしたイジワル。くっそーと肩を落として呟く快斗がちよつと可愛い。そう思ってしまうのはいけないのだろうか。

こんなによくしてくれているのに、申し訳ない。…でも笑える。

「…なんだよ、その顔」

「べつにー。でもさ、こんなに魚に囲まれて、魚嫌いを克服できたらいいね！」

「…いや、別に克服できなくていいから…」

ハハハと空笑いをする快斗に、少しだけ可哀想に思えてくる。それでもやっぱり快斗と一緒にここで遊びたくて、じゃあ帰ろう、というその言葉をわざと言葉に出さないようにしていた。どうすれば快斗が少しでも楽になれるか。しばし考えていたら、妙案が浮かんできて。ぼむ！と両手を目の前で打った。確かバツクの中に『アレ』が入っていたはずだ、と。

「じゃあ目隠しでもする？青子、アイマスク持ってきたんだ」

「んなアホな…。俺はどうやって歩けばいいんだよ…」

「じゃあ青子が快斗の目になってあげるよ」

「目…？どうするんだよ」

「だあかあらあ……。こつするのよ！」

「え、ちょ、おい！」

快斗の手をぎゅっと握る。青子より一回りも大きい、そして骨ばったその手。男の子の手だ。握ってから一瞬ばおつとしてしまったけれど、慌てて言葉を続けた。

「ずっと握ってあげるから。青子が快斗の目になって、いろんなところに連れていってあげる。こうすれば自由にいろんなところへ行けるし、何も見なくていいでしょう?」

一瞬その言葉に、目を丸くして快斗が青子を見つめていたが、突然さっと目を逸らし、ボソリと言った。少しだけ機嫌の悪そうな顔。だけど少し顔が赤いのは気のせいだろうか。

「アホか。そんな俺ら目立つただけだって」  
「そっかなー。いい案だと思ったのに…」

思わずぶうと頬を膨らませた。せっかく快斗のためにと考えたのに、アホ呼ばわりされるなんて納得いかなかったから。そう青子が拗ねた顔をしたら、快斗が口元に笑みを作ると、

「…いいよ、マリランドつつつても、全てが魚じゃないんだろうし。船とか海賊とかそういうのだってあるんだろ?」

「…う、うん」  
「だったら大丈夫だし。…それに、ホントに魚ばかり囲まれてどうしようもなくなったら」

「…なくなったら?」  
「オメーの顔見ることにするよ」

どきんっ

思わず胸が高鳴る。

何、それ。どういう意味?

「え?どうして…?」

「…ん、だつてさ…。オメーの顔見ると癒されるっつーか」  
「え？」

「だから…オメーのアホ面見てるとおかしくなって笑っちゃうの。  
…おかしくて、気持ち悪さなんて吹っ飛んじゃう」

は？

一瞬何を言っているのか信じられなくて青子は耳を疑った。  
それから、我に返って、気がつけば大声で叫んでいた。

「…はあっ！？何それ！。青子のどこがアホなのよ！。言ってみな  
さいよ、このバ快斗」

「どこって鏡見てればわかるだろお。ケツケツケ」

ケラケラと笑う快斗に、本気でむかむか腹が立って。具合悪いん  
じゃなかったのか、と。

「もういい！快斗なんて魚に囲まれて泡ふいて倒れちゃっても知ら  
ないから！…もう快斗の心配なんかないから！青子が行きたい乗  
り物、全部制覇してやるんだから！責任持って付き合いなさいよ！」  
「…え、マジ…？それは勘弁…」

「うっさいうっさいうっさい！絶対絶対付き合ってもらうんだから  
ね！べえええだっ！」

あかんべえをして見せて、青子は快斗を置いてせかせかと先へ進  
む。

今朝のあの優しさ、齒の浮くような気障な言葉は一体何だったの  
だろうか。

あれこそが夢だったのだろうか、なんて思ってしまう。

苛苛苛苛苛。

「知らない知らない、快斗なんて知らない！ナマイキなこと言つて、所詮魚嫌いの弱虫じゃない。青子のこといつも馬鹿にして！青子だつて快斗のこといっぱいいっぱい馬鹿にしちゃうんだから。今日の夕飯も明日の朝食も、お弁当も、夕食も、快斗のお母さんに頼んで全部魚づくしにしてもらうんだから！！青子のこと馬鹿にしたこと後悔させてやるんだから！！」

せかせかと前へ進み、ずんずんと前へ進み。一人でどんどんどんどん先へ進み。

追いかける気配がないことに気づき、不安になって振り返った。

誰もいない。

いつのまにか人ごみに埋め尽くされ、その中に青子ぽつんと一人だけ。

「…かい…と？」

何でいないの？

さああつと血の気が引き、なんともいえない不安に駆られ、ポケットから携帯電話を取り出すと、快斗あてに電話を発信する。かつこ悪いと言われるかもしれない。またバカにされるかもしれない。けれど、はぐれたままなのもイヤだし、せつかくやり直した誕生日もめちゃくちゃになるのもイヤで。

なのに、通信音ばかりで。なかなか相手に繋がらない。

「……………何よ、快斗のバカ。…どうして出ないのよ…」

3回続けて電話をかけたのに。1度も出てくれなくて。慌てて元きた道を引き返す。別れた場所に戻ってみても、やっぱり

り快斗はそこにはいなくて。きよろきよあたりを見渡して、深く溜息をついた。

「青子が残酷なこと言ったから、そのまま逃げちゃったのかな…。それとも、怒っちゃったのかな。…青子を置いて帰っちゃったのかな」

そんなの、イヤだ。

「やだよ…。快斗。…青子を一人にしないで」

快斗…

「快斗…」

「はい？なんでしょう」

「っ！？」

振り返れば、快斗がにやにやと笑って立っていて。思わず青子は彼の胸に勢いよく抱きついた。

「っ！？な、何すんだよっ」

「バカバカバカ！！どこ行ってたのよ！置いてかれたと思ったじゃない」

「…いや、置いてかれたのは俺なんすけど…」

「っ…それはそうだけど」

わけがわからない、という困ったような顔で快斗が自分を見つめるから、何となく決まり悪さを感じて、それからぱつと快斗から離れた。どこへ行ってたの、そう聞こうとした時に差し出されたのはミント&バニラ味のソフトクリーム。ホワイトとパステルブルーが



交互にくるくると混ざったその色は何とも涼しげで。

「そこで買ってきたんだ…。それ食って機嫌なおせよ」

「イヤよ。…甘いもの食べたら機嫌直るなんて思われたくないもん」

ぺろりと嘗めれば、バニラの甘さと、ミントのすーと鼻を僅かに通る心地よさを体感して。

「ウソつけ。もう機嫌なおってら」

「なおってないもん」

けれども、からかう快斗に抗議するように言った青子の顔は、既に少しだけ笑っていた。

そのあとは本当にあっという間に青子の機嫌は直って、思った以上にいろんなアトラクションに乗った。コースターあり、魔法の絨毯あり、コーヒーカップあり。

どのアトラクションも、最初に快斗が思ったよりはそこまで魚だけを出しているわけでもなく、時たま現れる魚の人形には目を瞑ったり、手に汗を握って青子に笑われることもあったけれど。何度か気

分が悪くなることもあったけれど。それでも何とか順調にいろんなものを乗りこなしていった。

平日のせいかな、あまり込むこともなかったのも2人の行動を後押ししていたように思う。

閉園時間は21時だったけれども、もう18時の時点で買い物も済ませ、2人は大満足で、帰り道を歩いていた。

「快斗、すごかったねー、楽しかったねえ」

「ああ、そうだな」

疲れが身に纏っていて、夢でも疲れを感じるなあなんて頭のどこかで思いつつ。目の前の青子は疲れを感じさせない。朝にも増して元気が体中に漲っているように見えた。そんなことを言っても、自分も疲れと共に青子の笑顔を見られたという満足も一緒にあったのだけれども。これで、プレゼントなんてあつたら最高なんだけれど……。きつと夢の中のものには現実にまで持つていくことができないから。

……て。

あれ？

そういえば、とふと思い出す。昨日の……。1回目、俺が快盗キッドとしてオヤジを殺した組織と対決してたあの夜。ホントは渡すはずだったものがあるんじゃないか。夢だとしても、昨日は『昨日』なんだから。バックの中を漁れば、じゃら……と音がした。

確かに冷たいチェーンと石の感触。思わず、ふっと口元を緩ませた。

「青子」

「…え？」

軽く彼女の首筋に触れば、ポンと小さな爆発音と共に首につけられたネックレス。

銀のチェーンに、控えめにきらめく、エメラルドグリーン色をした宝石。金のかめのの中にしっかり入った2カラットの代物。それはどう見てもホンモノにしか見えなくて。彼女の首もとできらきらと輝きを放っていた。

「な…にこれ」

「ん？誕生日プレゼント。ホンモノの石じゃねーけどな。世界でひとつしかねーんだぜ？」

そう、世界で一つしかない代物。

なんたつてそれは、どこにも売っていない、俺が青子のために作ったやつなんだから。

・・・いつもホンモノを盗むものために、万が一のために模造品を作っている俺にとつてはそんなものを作るのは容易いこと。難しいことではない。けれど、いつもと違うのは人を祝うために作ったモノ。だから・・・。

「ハッピーバースデー。……………青子」

「いいの？…だって、『昨日』だって祝ってもらったよ？素敵過ぎるプレゼント青子に快斗はくれたじゃない。それに、今日だって」

「いいんだよ、あれはあれ。それに、これが本当にオメーに渡したかったものだったんだから…。…だから、大事にしるよな」

「…う、うん」

潤んだ瞳で、青子はじつと快斗を見つめていて。

その瞳に急激に体温は上昇し、心音はどうしようもないほど高鳴って。

やべえ、なんでそんな目で見えるんだよ。そんな目で見られると、どうしていいかわからなくなる。

その気持ちが届いたのか、それともたまたまか。青子はさつと俯き、それから涙を拭くと、笑顔を作っていた。まだ、嬉しさの涙の方が勝って、本当に笑顔が作れていたわけではなさそうだったけれど。

「ありがとう……快斗。…ごめんね、いつも迷惑かけて、我侭ばかり言つて。…なのに、なのに、どうして快斗はそんなに青子に優しくしてくれるの?」

「…それは」

「…青子ね、快斗と出会って本当によかった。……青子ね、青子…快斗のことが」

え?

まさかまさかまさか。

「快斗のことが」

どくんどくんどくんどくんどくん。

心臓がさらに高鳴っていく。青子はようやく落ち着いていたのか、もう涙はなく、にっこり笑ってこつ言った。

「快斗のことが大好きだよ。…世界中のだあれよりも！」

ちゅ。

ほっぺたに軽く触れるもの。柔らかくて、温かいもの。

一瞬呆けたような顔をして、信じられないような顔をして、目を真開いたまま視線だけを横に向ければ。赤くなった顔で、それでも笑顔で笑った青子がいた。

「タイムリミット」

ふと、誰かの声がする。その声にはっと我に返った。その声に『起された』と言ってもいいほどに。

その周りには人がいなかったはずなのに。何かの予感を感じ、振り返れば――。

そこには布を頭から被ったおばあさんが立っていて。にやり、笑った。

瞬間、それが快斗の知っている人だとわかった。こいつは。

紅……………子。

そう思った瞬間、白い靄が2人を、――いや、3人を襲った。あの、ツンとした匂い。

そして、気がつけば老婆の姿も、そして青子の姿もなく。

「青子っ……」

愛しき女性の名前を呼ぶ。けれど、そこには既に自分しかいるように思えなくなっていた。

『……………どう？最高のバースデープレゼントになったかしら』

靄の向こうで、老婆の声ではなく紅子の声で、それは声高らかに言った。

「ああ…サンキュ…な」

快斗は頬に指を押さえながらさもなく口元を緩ませる。再び意識はなくなりつつあるのに。それでも、その部分だけの意識ははっきりとしていて。

彼女の唇の感触が起きても残ればいいと思った。

『…もう少し早く迎えにいけばよかったですわ』

ボソリ、靄の向こうで、彼女がボソリ、呟いた。キスなんて許せませんわ、と。

そんな彼女の言葉を聞き、ばやけた頭の中で苦笑を浮かべていた  
さなか  
最中。

快斗の中で、意識は完全に、ぷつぷつと…。

途絶えた。



+ 後編 +

朝が来る。

6時50分。

携帯電話のアラーム音によって、青子はぱちりと目を覚ました。ベッドの上。辺りを見渡せば、何の変哲もない中森家の、中森青子の部屋。鳴っていたアラームの音は、特別な日ではない。なんら変わらないつまらない平日を示した音楽。日付は青子の誕生日の翌日を示していて。

「…ゆ、め」

青子は、やけにはつきりとした意識の中、くしゃくしゃになった髪をさつと少しかきあげ、あたりを見渡した。前日、青子がバースデーパーティをしたとき友達にもらったプレゼントの山が机の上にてんこ盛りになっていて。昨日、白馬に送ってもらったばかりの白い17本のバラは活き活きと花瓶の中で咲き誇っていた。ほおつと小さく息を吐く。

「……夢、だったんだ」

すごく幸せな夢を見た。夢の中で、快斗がこれは『夢だ』といい、『もういちど誕生日の日に戻れたんだ』なんて変なことを言い、2人でトロピカルマリナランドに行き、快斗が具合が悪くなり、ケンカして、仲直りして。…最後に。

そつと唇を押してみた。

この唇が触れた…。快斗の、頬。

柔らかくみずみずしかった感覚。夢なのにリアルに未だ<sup>ま</sup>この唇に  
感触が残っている。

夢とはいえ、何てことをしたんだろ…。  
思わず体全体が熱くなった。

夢の中で、相当恥ずかしいことをした。けれど、これが夢じゃなければ…とふと思ってしまう。小説や漫画の話の中だと、実は現実でも体感した、なんていう証拠がどこかにあつて。

「あ」

青子はさつと首もとを弄る。快斗がくれた、緑色の宝石のネックレス…。これが実際に起こったものならば…。なのに。

「あるわけないか」

首筋には何もなくて。ポケットも、辺りを見渡しても。  
ふうつと小さく溜息をついた。そんな魔法のような話、実際あるわけないかと。

それでも実際見たこともない素晴らしい夢を、忘れることはなく、  
始まりから終わりまで覚えているなんて。これもまた神様からのち  
よつと遅れた誕生日プレゼントなのかな、なんて思ったりした。  
そうして大きく伸びをする。

「さあ、これから学校行く準備始めなきゃ！」

みんなに昨日はパーティ来てくれてありがとうって言うんだ。  
快斗に、パーティは残念だったけれど、昨日の夜景のプレゼント、  
ありがとうって言うんだ。これからもよろしくね、って言うんだ、

と。

青子は急いで自分の部屋に戻るために階段を駆け上った。

いつもの学校、いつもの授業、何も変わらないいつもの日常。

青子は横でぐうぐう居眠りをしている快斗を見て、ちよつと笑ってしまふ。

結局快斗は遅刻ギリギリに学校にやってきて。快斗だけはお礼も言えずじまいだった。

「ねえ、快斗。今日は素敵な夢を見たんだよ・・・？」

眠ったままの快斗にそつと語りかける。

「快斗と一緒に、マリナランドに行くんだよ？そうして」

「俺も見ただぜ、その夢」

「え…？」

ぱちり。

快斗の瞼が開いて、机に突っ伏したままの体制で、彼が自分を見つめていた。

「快斗……」

「それって、もう一度17歳の誕生日を迎えられるつつう夢じゃなかったか？」

「う、うん……」

「誕生日プレゼント、渡したろ？」

「う、うん」

「……ほれ」

「……え？」

机の下でそつと握られるのは。  
夢とまったく同じもので。

「ええええええつ……!!」

思わず甲高く叫んでしまった。……もちろん、クラスメートの沢山の注目と、そして笑いの渦に巻き込まれることになったのだけども。

「……あ、ほ」

ぶつと噴出して、快斗がおかしそうに小さく言った。

「なっ……なによぉ!!」

混乱を抑えきれないまま、それでもちよつとむつとして快斗を睨んだ。そうして目線をずらせば、彼の手元のノートに蛍光ペンで大きく書かれる文字。

『ハッピーバースデー青子！ これからもよろしくな！』

「…もう、17歳の誕生日祝うの、3回目だけだな」

おかしそくに笑う快斗に、青子も思わず口元を綻ばせた。  
クラスの注目を浴びて恥ずかしい気持ちも、アホと言われて怒った  
気持ちも、何もかも吹っ飛んで。

「ありがとう」

小さい声で呟いた。

あれから数ヶ月。今でもあの時のことは鮮明に覚えている。まるでそれは昨日……。いや、さっき起こったばかりかと思ってしまうほど。

あの夢は本当に2人で共有した夢だったのだろうか。今でもやっぱりその考えは消えなくて。だとしたらとても不思議。一体どんな世界に迷い込んだのだろう。驚きとともに、嬉しいこと、幸せなことで。

けれど、一つ気になることがある。それは。

「…青子のキス、今でも覚えてる？ スキって言葉も、覚えてる？」

聞くに聞けない、たった一つの気になること。

自分は一語一句覚えているから……。もし、あれが青子の作り出した快斗じゃなくて、最後まで『快斗』本人だとしたら。

きっと自分のように覚えていて、聞かないふりをしているのかなあ、なんて思っ

そう思つとやっぱり恥ずかしくなっちゃうけど。……。でも。

もしそうならば、そのままです。

聞かなかったふりをしていて。

いつかは、ちゃんと、覚めたら終わるものではなくて、未来があるものとして……。現実として青子から言うから。ちゃんと好きだっけ言うから。

だからお願い、待っていて。

ね、快斗。

ハッピーバースデーを、ありがとう。

終

＋後編＋（後書き）

＋＋＋あ　　と　　が　　き　　＋＋＋

はじめまして&こんにちは、こつぶです。「まじつく快斗」というジャンルに投稿させていただきまして、ちょこつと緊張しています。

こちらまで読んでくださってありがとうございます。

今回のお話は、粗筋にも載せていましたが、青子ちゃんの誕生月を祝おうという企画様に投稿させていただいたものです。すみません、こつぶにも載せちゃいました（苦笑）。連載モノにするつもりはなかったのだけれど、そして話はもつと別の話だったのですけれども、どういうわけか、こんな感じに（笑）落ち着きました。ていうかまた夢ネタかよ、異世界、タイムスリップネタかよと思っている人もしくはいるかもしれません。：こつぶの小説を読んでくれている人がもしいらつしゃってそんな気持ちになられた方がいたら、ごめんなさい（苦笑）何もいえません。ていうか連載そっちも頑張ります（苦笑）

まじつく快斗だけを書いたのは、昔書いた「聖なる夜は君と・・・」以来かな。その中に快青ネタがあったのですが、純粹にこれだけつてのもまたはじめてなのです。だからうまくできるかなあと思いつながら書きました。普段、新ちゃんやら蘭ちゃんやら、哀ちゃんやら・・・とコナンネタでやっているの、快斗くんがどうしても工藤さんに見えてきて仕方ありません。・・・青子ちゃんも、エセに見えたらごめんなさい（苦笑）

でも愛だけはすごく籠ってます。本当に。大好きです、この2人。



紅子ちゃんもすごく大好きです。彼女をいっぱい今回使えてよかったー。

と、いうわけで。青子ちゃん、誕生日おめでとうー！幸せになってね。

補足ですが、今回の小説、星で段落を分けているわけですが。白星　　は、青子ちゃん視点、黒星　　は、快斗くん視点になっています。見難かったらごめんなさい。

それでは本当にありがとうございましたー！！また「まじっく快斗」ジャンルでアイデアが浮かびましたら頑張って投稿したいので、その時はまた見てやってください。どうぞよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7366c/>

---

ハッピーバースデーをありがとう

2010年10月9日07時49分発行